



第23号

栃木県書道連盟
 会報
 会長 中野 永峰
 会員数 現在920名
 〒321-0951
 宇都宮市越戸4-4-21
 TEL (028) 661-6329
 編集事務局
 振替口座 00340-3-9017
 〒329-0434
 河内郡南河内町祇園2-19-410
 印刷 松井ビ・テ・オ・印刷

本連盟の書道文化の向上発展と 後継会員の育成を目指して



会長 中野 永峰

会長 中野 永峰

新涼の候、会員の皆様方には益々ご清祥お慶び申し上げます。

平成十六年度の連盟総会に於て、会員の皆様方の温かいご支援によりまして、会長職を再任させて頂いたございました。誠に微力でありましたが、人生意気に燃えて、連盟発展に最善を盡したいと心新たにいたしております。今後とも何卒よろしくご指導ご支援の程お願い申し上げます。

近年、人々の関心は、物の豊かさから、心の豊かさへと次第に移りつつあり、人間とし

ての真の喜びを、文化に求める傾向になっているように思われます。

書道は、三千五百年続いてきた伝統ある文化芸術です。文字は誰でも書くので手軽に始められると同時に、生涯を通して親しめる趣味としても素晴らしいものであり、多くの人々が精進しています。又、上手に書くことだけでなく、書を通して自らの精神を高め、書法を鍛え、人生そのものにもなる奥深い芸術であります。

佐藤一齋（一七七二―一八五九）は、江戸末期の儒学者で、「言志録」という本を著わしました。その中の有名な語句を引用します。

「少クシテ学ベバ、即チ壮ニシテ爲ス事アリ。壮ニシテ学ベバ、即チ老イテ衰エズ。老イテ

学ベバ、即チ死シテ朽チズ。」

佐藤一齋は、十二、三才で、大人と肩を並べる程に経書に通じ、学者として米寿で没する迄これを実践したとのことでした。

何時の会議におきましても、最初に事務局長が「現在の会員数は何名です」との報告から始まります。総会の平成一六・四・二五現在の会員数は、八六六名（男性三五〇名、女性五一六名）でした。連盟の目標としては、

会員千名を越したいと願っています。役員を始め、会員の皆様方のご協力をお願いいたします。

併せて、質的向上において、佐藤一齋の言志録が書学の一助になればと思います。この言葉は、西郷隆盛も暗誦していたようです。別に又、「年をとって老いるのではなく、理想を失えば老いるのである」の戒語にも反省させられます。

さて、平成十五年度の書道連盟は、平成一四・五・一九の規約改正、機構改革後二年を経て、理想的な運営がなされてまいりました。

十五年度の行事につきましては、事務局、総務部、研修部、書展部におきまして、各部長を中心に、周到な計画により、多大の成果を挙げることが出来ました。（行事報告参照）

会費の徴収状況につきましても、会計係のご盡力と、会員のご協力によりまして、過去最高の八三五口を納入する事が出来ました。

会議は六十余回が開催されました。役員一同のご盡力に対し、深くお礼を申し上げます。

十六年度の行事につきましては、向上発展に盡したいと存じます。会員の皆様方の温かいご指導ご支援をお願い申し上げます。

最後に、会員の皆様方の益々の筆硯ご多様をご祈念申し上げる次第でございます。



行事報告

平成十五年度連盟会員展

副会長 赤澤 豊

会期 平成十五年五月十六日(金)～十九日(月)
会場 県総合文化センター第三・第四ギャラリー

県庁前通りの栃の木が若葉が色鮮やかなア
ーチを演出する好期、恒例の栃木県書道連盟
会員展が開催された。

皆さんご存知のように今回は新たな年、親
睦と開かれた栃木県書道連盟を目標に、組織
と規約が大幅に改正された後初めての会員展
である。

書展部が中心となり総務部・研修部・事務
局の連携よく、正に我々による我々の書展と
いう信念の元に団結し、郷土の文化を高めよ
うとする県内最大組織の大書展である。



搬入飾り付け当日は、柿沼翠流書展部長と
兼目悠久書展副部長を中心に、書展部と事務
局と各地区からの先生方のご協力を得、搬入
受付陳列と新組織らしい万全の段取りでチー
ムワーク満点の働きであった。事前の準備を
入念に何回も打ち合わせがされたと聞いている。
陰の膨大な時間と努力無くては果たし得
ないことで、皆様に心から深く感謝します。

会場に一步足を踏み入れると、他の書展で
感じるような少し枠にはめられ、互いに競い
合っている作品発表と異なり、会員各自が日
頃それぞれの会派で研鑽を積んでいる書表現
を創造力豊かに、心の底から情熱溢れんばか
りの力作三十九点が展示されていた。それは
幽玄で魅力ある書の世界を演出し参観者を楽
しませた。正に会派を超えた書の饗宴、栃木
の書の大交流展であった。

今年のジャンル別出品状況は、漢字多字数
二五七点、漢字少字数(二字以下)三六六
点、仮名三六六点、漢字かな交じり三九点、篆刻一
〇点、刻字一点という割合であり、例年通り
漢字多字数が圧倒的に多く、他のジャンルの
少なさに何か寂しさを感じた。

形式を見ると殆んど縦物で横物は三三三
これは公募展などの影響なのか。多分、イン
テリアの一部とし、鑑賞を目的にどこかの壁
面に飾るとすれば、扁額のようなものになる
のだと思うのは私だけではない筈。これから
は生活の中に融合する書も制作し、鑑賞を目
的にした書作への挑戦や心がけも大切なこと
だと実感した。

最近、現実的な問題として、少子化や経済
不況の中、書道人口が低下し、皆さん方の書
活動にもいろいろご苦労があるものと思う。
そこで我々栃木県書道連盟会員が、今、力を
合わせて真剣に書の魅力や書の必要性をしっ
かり考え、社会に啓蒙し継承していかなく
ばならないと思う。

今回、新体制での特別企画として、「良寛
拓本展」川口壽亭先生所蔵を第三ギャラリー
に展示し、意義深い書展が開催された。普段
目にする事の出来ない良寛の拓本二十二点
は良寛さんの人となり、が書の命の響きとな
り、心に大きな感動を与えてくれた。温厚篤

実な川口壽亭先生には、この好機に貴重な拓
本を快く提供展示させていただきましたこと
心から厚く御礼申し上げます。

展示した良寛拓本は次の二十二点であった。

《特別展示 良寛拓本展》川口壽亭先生所蔵

1 良寛堂歌碑「いにしへに」

2 南木曾町妻籠歌碑「きそち耳て」

3 良寛自書像「世能中耳」

4 五言詩「閑庭百花發」

5 由之老宛「この古る出雲崎耳て」

6 昭明寺密藏院歌碑「寺泊におりし時よめる」

7 岩室田中の松歌碑

8 自然(じねん)

9 乙子神社詩歌碑「生涯頼立身」

10 五合庵句碑「堂久保登盤」

11 法爾

12 五言對句「君看雙眼色 不語似無憂」

13 一連碁

14 熊の森御名号碑「南無阿彌陀佛」

15 心月輪

16 久駕美天羅

17 維係尼宛「君欲求藏經」

18 七言斷簡「一箇繡毬打又打」

19 彌彦歌碑「美都東里能」

20 徳昌寺詩歌碑「香積山中有佛事」

21 「安之飛き能久閑美能やま耳」

22 本覚院につかひてよめる「やまふき能」

今年の栃木県書道連盟会員賞は次の三名が
榮譽ある賞を受賞しました。おめでとうござ
います。この選考に当たられた川口壽亭先生
から受賞された三名と候補となった十名の講
評を次のようにいただきました。

《栃木県書道連盟会員賞》

◎荒川紫石氏

一字一字が楽しく書けていて、整然な中に
もこの人の世界の大らかさに好感をもてた。

◎石川子澄氏

文字の疎密、余白の変化、最もオーソドッ
クスに書かれている。今後に期待したい。

◎星 司光氏

一生懸命習うことはお稽古ごとの基本であ
る。人の出来ないことに努力することの範と
なっている。

《候補作品》

◎石原麗満氏

いかにも大字、仮名の見本のような作品、
文字が正面を向きすぎ、鋭い線が出るための
用筆に工夫されれば佳品となるでしょう。

◎井上千鶴氏

起筆と横画に妙味を感じた。「先・知」に
工夫が欲しかった。

◎五江潤壺水氏

大らかさに注目したい。ただ、間合と用筆
の際の遅速が一定なので余白に変化が少なく
なった。そのために面白さを半減した。

◎佐藤英華氏

トボケタ味が何とも云えない楽しさを感じ
たが、側筆の部分の押した線に工夫が欲しか
った。

◎早乙女児楓氏

この人の世界の広さが文字表現に連なって
いて楽しい書になっている。「畔」の墨量に
注意。

◎勅使河原素山氏

達筆さは認めなければならない。文字構成
の際の余白をもっととってみてはどうであろ
う。

◎登坂時子氏

淡々と書けているのが好感。ただ漢字大き
く仮名小さくのパターンをやめるべきでしょ
う。

◎半田鈔月氏

デフォルメと時々間のびした線の変化に面
白さがあった。「江・是」横画が躍動感を止
めた。〇〇詩は作品を暗くした。

◎古橋洋子氏

「武・桃」がくだけたとき、この作品は優
れたものになるでしょう。

◎山田香邨氏

重量感はないが鋭利さに感心させられた。
独自の隗意が楽しい作品にしている。
最後に、

この会員展に多くの役員の方々やご協力い
ただいた会員諸氏のご苦労に心から感謝いた
します。

平成十五年度連盟展 受賞のことば

荒川 紫石

この度は思いもよらない連盟古舟賞受賞にあづかり、ありがとうございます。

受賞式で、感想申し上げましたが、喜寿を過ぎた老書生、賞は昔のことと思っていました。まさか、私が、とびつくりの連続でした。審査をして下さった、川口霽亭先生に心より感謝申し上げます。

篆書を書き始めてから、十数年になります。が、未だ篆書での自分の書を見出せず苦しんでおります。

今後はこの賞を機に、老骨に鞭打ち尚一層書作に精進して参ります、諸先生方のご指導の程お願い申し上げます。



連盟賞「王昌齡詩・西宮愁怨」荒川 紫石



連盟賞「游龍門」石川 子澄

石川 子澄

この度は、栄えある連盟古舟賞ありがとうございます。良寛の人柄や生き方に、以前から関心が有り、昨今、良寛の詩を作品に取り上げる事も多くなりました。折しも今回、良寛研究家の川口霽亭先生にお目を止めていただいた事に、慶びと共に驚いております。思い描いた書を筆先にまで伝えられない苛立ち、もどかしさ等々、葛藤の日々が続いている中、この受賞がどれ程の励みになったか計り知れません。この感激に浸れるのも一重に諸先生、諸先輩のご指導の賜と心より御礼申

申し上げます。今後も牛歩乍ら、努力、精進を心掛けたいと思います。更なるご指導ご鞭撻お願い申し上げます。

星 司光

この度は、思いもよらぬ連盟賞をいただき、誠にありがとうございます。

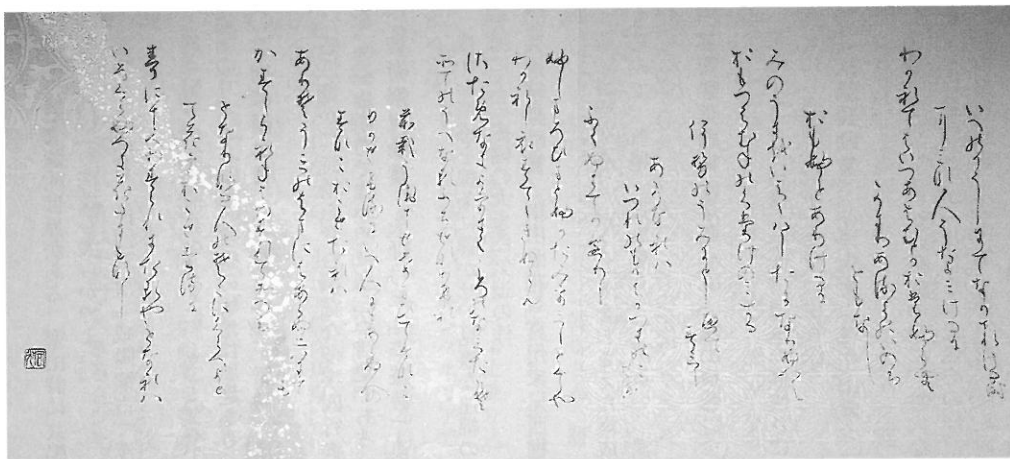
審査に当たられた川口霽亭先生は金子鷗亭氏に師事され、現在は良寛研究家として活躍されている。川口先生は講演の中で、良寛の書は見るものでなく聴くもの、良寛の書から出る「妙なる音」に耳を傾けて鑑賞すべきであり、書は「聴く芸術」である。とおっしゃられた。

私の作品は伊勢集の原寸大臨書である。書の勉強においては、古典の臨書は欠かすことのできない大切なものであるが、展覧会等で評価を得るのはむずかしいと感じている。そうした中で、書は「聴く芸術」であると考えている川口先生の目にとめていただいたことはうれしく、驚きでもある。これからは、展覧会の出品に際して、見る人の心に響いてい

く作品が書けるよう努力していきたいと思う。

この受賞を機に、さらに研鑽を積んで参りますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

連盟賞「臨伊勢集」星 司光



平成十五年度県芸術祭

第57回栃木県芸術祭美術展

書道部門 報告

会長 中野 永峰

第五十七回県芸術祭美術展・書道部門は、応募数三九八点で、入賞入選数は二七五点、入選率六九・一％であった。

昨年より二八点増の応募であった。これは昨年度から導入された入選作品の掛替え展示により入選率が上がった為と思われる、年々出品の増加と作品の向上と共に、県書壇の発展が期待され誠に喜ばしい次第である。

過去、応募数四〇〇点を越したのは四回あり、平成十年の四五四点（五一・三％）が最高であった。顧みて飛躍しなければならぬと思われ、書道連盟の役員を始め入選者により一層のご協力をお願いしたい。

審査の内訳を、ジャンル別に表記する。

漢字	74%	応募	二九二点	入選	二〇四点	六九・九%
少字数書	8%	応募	三二点	入選	二二点	六三・四%
近代詩書	5%	応募	二二点	入選	一四点	六六・七%
仮名	7%	応募	二九点	入選	二〇点	六九・一%
篆刻	6%	応募	二四点	入選	一五点	六二・五%
刻字	0.3%	応募	一	入選	一	一〇〇%

今年の書道展の部門別の出品点数において、漢字部門が全体の七割強を占め、他の五部門で三割弱というアンバランスが見られた。

現代書派の、少字数書や近代詩文書部門への積極的な出品を要望したい。仮名や篆刻や刻

字の各部門とも遠慮せずに参加を切望する。

県芸術祭の書道展参加は、自己の人生表現の場であると同時に、世界に誇る書道の伝統文化の継承発展に盡くすためにあるわけである。正に参加することに意義あり、であると思う。

今年の書道展の全般的內容については、中央書展での活躍者が多数増加し、県展の水準の高まりを痛感する。特に、漢字多字数部門は、明清朝を始め、諸派の作品も、五言律詩、七言律詩の三行書一八物の手慣れた行草作品が圧倒的多数を占めて充実していた。

少字数書、近代詩文書、仮名、篆刻、刻字の各部門とも、傑出した作品が少なく、芸術祭賞、準芸術祭賞とも漢字多字数に譲った。全部門を通して、技術的に古典の勉強不足や、墨色の研究も足りないように思える。

今後出品者へのアドバイス。第一、題材の作品構想は深く思索する事。従って杜甫詩と

か、七言絶句、短歌などの題名になるわけではない。題材の核心に触れる言葉で題名にし、作品構想には徹底した思索をする事である。

第二、古典は作品を保証する。古典を学ばずして本物は得られない。平凡なることを反覆練習せよである。

第三、空間に靈氣が宿ればよい。

受賞者作品書評

○芸術祭賞 左川青巍「縦遊歸泊湖橋有作」

洗練された芸術性の高い作品である。鋭敏に詩情を運ぶ強い書線が際立ち、清澄な美しい空間は劇的である。(漢)8×2尺

○準芸術祭賞 倉持玄風「趙鶴詩」(漢)8×2尺

筆力十分なタッチと、運筆のリズムによって、悠然と安定した作品構成がなされ、経験の豊かさを物語る手練の作品である。

○準芸術祭賞 村田幽香「題張氏隱居」(漢)8×2尺

練達された感性豊かな書線による作品による作品構成の巧みさは見事である。特に空間余白の明るさに技量の冴えを表現し、美的効果絶大。

○芸術祭奨励賞 大塚清岳「阮籍詩」(漢)8×2尺

正則的な緻密な構成で、文字の大小抑揚の呼吸が行き届いた淡雅な作。

○芸術祭奨励賞 郷間大悠「寒山詩」(漢)

8×2尺

茫洋たる大陸の世界がある。寒山詩に共鳴の書か、書技も構成も大らかでよい。

○芸術祭奨励賞 館沼天游「咸陽懷古」(漢)8×2尺

悠々飄々の筆の流れのま、に、文字の大小強弱のリズムを生み、自適の境地に風趣あり。

○芸術祭奨励賞 鶴見芳花「王維詩」(漢)8×2尺

感性豊かに詩情を含む繊細な多字四行書を、強い集中力で律動的にまとめ清楚である。

○芸術祭奨励賞 矢野弓翠「李益詩」(漢)8×2尺

豊かな情感を線条に響かせ、見事な連綿の手腕による振幅の大きな氣迫の作。

○芸術祭奨励賞 横田蘭花「真州家兄西樵懷」

鋭い書線が光り、ポイントをおさえた構成も巧みで、首尾一貫性をもつて明るい。(漢)8×2尺

○芸術祭奨励賞 斎藤一吼「溪上梅花」(少)8×2尺

潤渇が生きて結構も緊密。運筆の軽快さに意を托し瀟洒。清浄な墨氣に梅香漂う。

○芸術祭奨励賞 赤澤寧生「秋空山頭火」(近)8×2尺

作為のないごく自然の構成の中に、悠大な秋空と作者の心境が一体になった無心の作。

○芸術祭奨励賞 柴白葉「春の苑」(仮)8×2尺

美しい日本の春の抒情を琴の音色のような書技で表現し、空間を生かした優雅な作品。

○芸術祭奨励賞 嶋田周「厚積薄發」(篆)39×30cm

縦横、単調になりがちな線の構成に光を取り入れ、章法に緻密な冴えを鏤めた力作。

(専門委員・審査委員長)

芸術祭賞「縦遊歸泊湖橋有作」 左川 青巍



平成十五年度研修旅行 研修部副部長 磯 翠茗

栃木県書道連盟・平成十五年研修旅行

『良寛を訪ねて（一泊二日の旅）』

十一月二十一日（金）、たつぷりと良寛を堪能しようと、研修旅行『良寛を訪ねて（一泊二日の旅）』が、吉田景堂研修部長の下に企画され、重原聖鳥常任顧問、赤澤・久津美・鈴木副会長を初めとする総勢二十四名が参加して挙行された。

朝七時二十分、JR宇都宮駅東口に集合。早朝小雨模様の中、遅刻者もなく、JT B手配の大型バスで予定通りの出発。八時、宇都宮ICに乗り、新潟に向かう。途中新津ICを降り、北方文化博物館を見学、壮大な庭園を経て屋内に入り、日下部鳴鶴の隸書横披に遭遇。あまりにも長大な一本杉の梁、それに続いて回廊を進んだ奥の部屋は書院造りの壮大な居室。そこから眺める庭園は、まるで絵巻物語。文化芸術の粋に彩られた江戸・明治期豪農の暮らしぶりに仰天。その後、館内のレストランで昼食となり、全員揃ったところで乾杯。馳走に舌鼓を打ち、和気諸々と歓談。食後の休憩に宝物館に入ると、西郷隆盛など明治維新期に活躍した政治家・文人墨客の書画骨董を中心に、世界四大文明に及ぶコレクションにまたまた仰天。しかし、敢え無く時



間切れとなり、記念館を後にした。十二時五十分、新津ICに入り、バスは一路、目的の国上寺・五合庵を目指す。十四時、小雨降る

国上寺に下り立ち、暫し雨に映える銀杏・楓の色彩を楽しみ、若い僧侶の案内に従って本堂に上がる。国上寺の淵原や良寛の修行の様子の子のレクチャーを聴く。ユーモアとペーソスが効いていた。その後、本堂の前で記念撮影。次いで良寛資料館に移り、念願の良寛の親筆に遭遇。龍飛鳳舞の闊達な筆致、清廉な風懷に感動。感動ノ感動ノはやる気持ちを押さえないが、紅葉の散乱する山奥の石段を降り、終に念願の五合庵。予想を上回る粗末な茅屋に衝撃ノ本堂に物がなんにもない小さな小さな居室。到底人の住める場所とは思われない。想像を絶する精神世界だ。こういう厳しい環境の中からこそ、生きとし生ける全ての物を慈しむ心が芽生えるのであろう。喧噪に住む我々との大いなる隔絶を感じ、驚嘆の想いばかりが胸を衝いた。ここでまた記念撮影。五合庵を訪ねた貴重な記録、それぞれの生涯の思い出になること必至。次いで、石段を降り、句碑を見学。深山の溪谷に懸かる吊り橋を渡ると風雨が強く、早々にバスに乗り込み、今夜の宿である弥彦温泉・弥彦グランドホテルに向かう。お湯に浸かって疲れを癒し、夕食の宴となる。秋の夕べに懇親を深め、書への思いを語り、夜もとつぷりと暮れていた。

翌二十二日（土）八時三十分、弥彦温泉を後にし、良寛記念館に向かう。バスに揺られること小一時間、記念館に到着。思い思いに鑑賞し、良寛への思いを膨らませる。資料館

を出ると強風に煽られ髪を振り乱す。少しく階段を上ると、眼下に壮大な日本海が広がった。荒れる日本海、実に壮大で痛快。眺望は絶佳ノ良寛がかつて佇んで見下ろしたであろう光景。その同じ光景を、時を経て今また我々が見ているのかと思うと、感興はたちまち昂揚し、胸がじいんと熱くなった。バスで山を下って海沿いを少し行き、ほどなく良寛堂・光照寺に到着。良寛生誕の地を散策し、思い思いに記念撮影。さらにバスで次の良寛記念館に向かう。学芸員の懇切な解説を聴きながら、膨大な数の良寛の肉筆を見学。ここで購入した良寛のビデオを車中で見ながら寺泊に向かう。十二時三十分、寺泊に到着し、山六水産で昼食。一人に一杯の蟹が付き、みんな食むのに夢中となる。蟹料理とあつては会話消沈も無理からぬこと。「幹事さん、設定やいかに」などの声も歓喜のうち。それぞれお土産の買い物を済ませ、バスに乗り込んで帰路に着く。福島のパークングエリアで小休止。また買い物をして、一路宇都宮を目指す。綾小路きみまろの漫談に耳を傾け、また歓談を尽くしながら、JR宇都宮駅東口に到着。十八時三十分、『書』で結ばれた友人たちの顔には、満面の笑み。暮れ行く秋のひとときを堪能し、良寛に触れ、いのちを輝かせた珠玉のひとつときを深く胸に刻みながら散会。秋宵の一刻も、直は千金ノ生きる喜びを深めた二日間でした。

平成十五年度女流展

前書展部副部長 兼目 悠久

第二十回記念女流展・協賛役員展

会期 平成十六年二月十四日(土)～十七日(火)
会場 栃木県総合文化センター第三、四ギャラリー

女流展は、女性の書道愛好者の底辺拡大と女性が気軽に発表できる場を提供しようとの目的で、昭和五十九年に第一回展が開催された。

今年、節目の二十回展を迎え、その祝意を表したいとして、連盟理事以上の役員による協賛展を併催し、女流展に花を添えることになったわけである。

第一回女流展は、出品数四十五点、二十回展は二三五点で、長い歴史を刻み、着実に根を下ろし発展してきたことは、誠に喜ばしいことである。

現在、書道連盟会員が八百五十余名、凡そその七割が女性会員であることから、女流展開催の意義は誠に大きなものがある。

今回の女流展は二三五点、役員展は五五点計二九〇点のスケールの大きい展覧会となった。

女流展の作品ジャンル別では、漢字一五四点(多字数一三六点、大字作一八点)、仮名四九点、漢字仮名交り二八点、篆刻三点、刻字一点であった。

漢字・仮名作が、例年通り多くを占めたが、色紙・半紙大から二・八の作まで、大小バラエティーに富み、レベルの高い展覧会であつた。



女流展会場

た。

入場者は昨年より百余名多く、一〇三〇名と連日盛況で賑わった。

二月十五日(日)には、講評会の後、第二十回女流展を記念しての祝賀パーティーが開

かれた。女流展出品者三十六人、来賓と役員四十五人、計八十一名が集い、和気藹々、女流展の歩みを祝い、今後の発展を祈って祝盃を傾けた。

女流展講評会は、第三回展から実施されている。今年は赤澤豊連盟副会長を講師に迎え、和気藹々、懇切丁寧で核心をついた講評に、皆さん熱心に聴き入っていた。講評を受けた人が非常に多く、赤澤講師も時間を大幅に延長して、講評に熱弁を奮っておられた。講評を受けた八十人の方の寸評をここに記します。(講評順。紙面の都合上、部分掲載、エキスを記した。ご了解を。)

○小森聖子氏 立体感出ている。更に柔らかさを。○斎藤和子氏 筆の動きに繊細さ出た。白の取り方に配慮を。○見目美舟氏 一字一字の具合よし。墨の濃さを考えて。○久住晴美氏 まとめよい。文字と文字の関連を考えると。○菊地清香氏 文字の安定感あり。賛の字を本分に合わせて。○川端清蓉氏 線よくまとまりあり。最後の字の処理は静かに。○小池素子氏 全体の収まり良好。文字のグループを作って書くといふ。○川原宜春氏 一気書き上げた。湯筆の線もほしい。○菊地継舟氏 三行物、章法いい。もう少し控え目に書くといふ。○柏崎麗泉氏 造型性と流動性良好。墨のにじみは一考。○村上千津子氏 線の変化出ている。一筆目に起筆はゆつくりめに。○小野田恵穂氏 四十字を調子よく書いた。縦横にもっと伸びを。○大平綾子氏 深みと強さあり。手首の運動を柔らかく。○大橋植徳氏 収める力よし。縦にする

か横にするかを研究して。○窪田連峯氏 隸書身につけている。横物をよく収めた。○大高玉香氏 気分よし。「下」の草体を味わいよく。○大関都史氏 隸書風作に挑戦し、健康で明るい作。○大島静彩氏 隸書作まともよし。どこへ出しても大丈夫。○及川紫峰氏 二行目頭特に良好。更に全体を考えて。○永塚薫風氏 リズム感あり。大字用に合った筆を。○宇賀神貴美子氏 調子よし。落款も本分にマッチさせて。○潮田恵子氏 四行をさらりと書いた。墨をつけた所目立ち過ぎぬように。○井上幸枝氏 感想だが、目を細めて見たとき墨が多かったか。○板橋紫香氏 臨書作よし。一字一字を書込んで半切に向かうといふ。○井野維子氏 小字だが収め方よし。次回大きく書いて。○石原麗蒲氏 筆使い良好。リズム単調だったか。○石原水蒲氏 暖かい作。違う線も入るとよい。○阿久津杏佳氏 品あり。白うまく生きている。○石崎典子氏 線に変化あり。書込んで完成度を高く。○石川子澄氏 大字と小字、本文と賛、調和している。○伊澤小園氏 線質と動きよい。更に落着きを。○飯田和代氏 よくまとまった。少し流れすぎた。○荒川光谿氏 まとまりよい。線に変化を。○荒井雅子氏 一期一会の苦勞したか。○安生克子氏 まとまりよし。文字群を作り流れよく。○阿久津天舞氏 さらりと書いて安定感あり。○樺山玉星氏 リズム感よく、うまくまとめた。○和田江楓氏 書き馴れている。もっと筆を開いて。○吉田長子氏 二行目頭よし。連綿使い過ぎると白が生けない時がある。○横田



女流展講評会

蘭花氏 大ききあり。風字の中に細線がほし
い。○山本紫苑氏 流麗な作。帯の字固い。
○山田光郎氏 作品を創る力を持つている。
○山口晴子氏 紙数を費やした作。真ん中の
上の気分が違った。○八木澤翠葉氏 書き
馴れた筆捌き。字粒の変化を。○松島芳子氏
流れよし。墨色の吟味を。○鈴木英華氏
線・配置よし。なお広さが出るように。○増
島美舟氏 余白生きた。落款印一考。○増
山貞子氏 章法よし。しんじょうの払い固か

った。○前田珠芳氏 線もゆったりし良好な
作。○細光路洗玉氏 隷書をこなしている。
更にすかつとした線に。○藤田貞子氏 小品
だが動きあり良好。○古橋洋子氏 収まりよ
し。肩の力を抜いて。○林游李氏 上の印よ
し。落款の文字くだけて書いては。○舟越早
苗氏 切れ味よし。疎密も考えて。○藤田小
華氏 書きなれてる。見せ場はもつと押さ
えて。○福富玲茜氏 よい作品。篆刻と書の
作品は別々に発表した方がよい。○竹澤光郎
氏 やさしさのある作。この調子で前進を。
○清水美千子氏 細線生きてる。「起」の
草体の払い短かく。○平間香蒲氏 扇面の柄
強かったか。用紙の選定に配慮を。○福田弘
子氏 篆書に挑戦した。やや重かったか。○
平石春水氏 全体豪快。リズム感あり。○
人見翠苑氏 吸い込まれて、読みたくなる作。
○長谷川瑞光氏 構成よい。小さい字も大
きく見えるように。○野沢安喜子氏 沈着
した作。筆の開いた所ほし。○中原睦美氏
収まりよく確かな作。○長棹芳子氏 少し固
い線あるが、全体よし。○時庭黄葉氏 線練
れている。最後の処理工夫を。○小林信瞳
氏 楽しく見られ、飄々とした作。○登坂時
子氏 上部よし。下部細字も生き生きと。○
鶴見芳花氏 文字のふところ広くなった。お
おらかな作。○塚原彩香氏 書き馴れている。
運筆のリズムよし。○塚原和子氏 平仮名の
みの作良好。行を整えて書いてみては。○田
名網萬静氏 ふところを広く渴筆も出るとよ
い。○高橋智子氏 収まりよい。もつと一気
に書いて。○高橋香代子氏 章法よい。な

お前後関係を自然に。○高野久華氏 柔毛筆
で良好。やや萎縮している。○関塚湧泉氏
ふつくらとしてよい。下はもつと空けて。○
須藤典子氏 中心は揃え、重心を変えた書き
方を。○鈴木小苑氏 筆の線の面白さ出て
る。暖かい作。○篠崎純子氏 豪快なタッチ
よい。墨のつけ方に配慮を。

平成十四年度より、連盟会員展・女流展は
書展部が計画立案、運営に当たっている。

展覧会では、飾り付けと取り外しに、時間
と労力を要し、お手伝い頂く方々の援助が必
要である。飾り付けは四十七名の方の助力を
頂きスムーズにいった。最終日の取り外しの
人数が十八名と少なく、あと十人は応援して
もらいたかったとの要望が強かった。
ご協力いただいた左記の皆様には厚くお礼を
申し上げる次第である。

〈搬入飾り付け〉

穂山玉星氏、石川子澄氏、石戸松波氏、井上
幸枝氏、岩瀬乙凜氏、大関都史氏、大平綾子
氏、軽部楊華氏、小林桂華氏、斎藤和子氏、
笹沼映子氏、白井薫苑氏、高橋智子氏、高橋
紀子氏、野沢安喜子氏、林圭子氏、前橋司澄
氏、松本畔雪氏、山口晴子氏、横田蘭花氏、
渡辺司寶氏、石附越山氏、小林正韻氏、橋本
竹泉氏、野中光雪氏、直井久美子氏、久津美
碧洋氏、赤澤豊氏、大浦舟人氏、柿沼翠流氏、
癸生川天游氏、石田鶴郎氏、生沼冬情氏、木
曾梅邦氏、兼目悠久氏、腰塚藤翠氏、篠原珠
篁氏、田中暁亭氏、長嶋石城氏、中山志峰氏、

谷古宇栖洞氏、矢野弓翠氏、中原睦美氏、山
中香葉氏、人見翠苑氏、村田幽香氏、山田雅
子氏(計四十七名)

〈搬出取り外し〉

生沼冬情氏、篠原珠篁氏、谷古宇栖洞氏、癸
生川天游氏、柿沼翠流氏、兼目悠久氏、長嶋
石城氏、赤澤豊氏、大浦舟人氏、橋本聖舟氏、
斎藤洋子氏、高橋紀子氏、神山紫香氏、渡辺
司寶氏、中原睦美氏、山中香葉氏、人見翠苑
氏、村田幽香氏、(計十八名)



女流展祝賀会

平成十五年度実技講習会

大竹 青嵐

講演会「金文について」
講習会「散氏盤・毛公鼎臨書と創作」

平成十六年三月十四日(日)、アピアにおいて実技講習会が開催されました。今年度は日展会員・読売書法会常任理事・大東文化大学専任講師である高木聖雨先生をお迎えし、「金文について」のテーマのもと、一日、熱のこもった講習会が行われました。

連盟会長の中野先生より、多忙の中をお越し戴いた高木先生への感謝の言葉があり、続いて、副会長の鈴木先生より、講師の紹介がありました。

高木先生は岡山県の御出身で、青山杉雨先生に師事され、その斬新な造形と鋭利な線質の篆書は早くから注目され、現在書道界のニューリーダーとして活躍が期待されています。

続いて高木先生からご挨拶と本日の資料の説明がありました。

資料は、散氏盤を呉大激が臨書したもの、毛公鼎を黃士陵が臨書したもの、それぞれの中から集字した「有徳」「正道」の文字が配布されました。参考資料として毛公鼎の拓本が示されました。

講演では、青銅器の歴史を調べる手順として①WHEN②WHERE③WHO④WHY・WHATという方法を青山先生が考案された。



①青銅器の起源は殷の中期、安陽期の時代にかんがりの青銅器ができた。甲骨と青銅器はある時期重複していた。周の時代が青銅器の全盛であり、春秋戦国時代と殷・周の青銅器は異質で、殷・周・秦・漢の時代にさがると青銅器は洗練されていった。

②殷後期では河南省安陽で発見・西周の時代では各地で青銅器が発見された。

③殷中後期に氏族標識として作られた青銅器は王からの功績を残すために一族の記録という性格を帯び銘文の文章が長くなってくる。

金石学を学んだ人たちに何紹基・趙之謙・呉昌碩がいる。金文を学ぶことによって様々な書体が出来た。何紹基と趙之謙の書体は、良く似ている。その中で若干の違いがある。何紹基は金文を学んだが、趙之謙は学ばなかった。文字の歴史からすると金文→隸書→草書→行書→楷書の順に学ぶのが正しい学び方である。

金文を学ぶには、青銅器の形態を勉強する必要がある。

(作品の作り方について)

①文章の選択は、漢以前のものを選ぶ。殷周の文字で明・清の文章を書くのはおかしい。

②字を調べる。同時代の文字を選ぶのが望ましい。文字がない場合、金文と甲骨文を合わせることもある。

③草稿を作る。画数の多い字と少ない字を組み合わせる。疎密の組み合わせを考え、デッサンを作る。完璧な原稿を作ってから作品づくりに入る。という説明がありました。

また、文字が上達するには、書作の環境を整えることが大切であり、文物を飾り、物の放つ気を感じとることも上達への道であると語られました。

午後には、高木先生による添削と作品揮毫がありました。「正道」と「有徳」を半紙に練習し、一人一人添削していただき、手本も



書いていただきました。模範揮毫では、全紙に「成徳」「値千金」「帰来」「乗龍」「和光」の文字を金文で書いていただきました。斬新な造形に参加者全員食い入るように眺めていました。真に先生の気を感じ取る揮毫となりました。

最後に、先生から金文は、好奇心や興味を持って書くことができる書体だと思います。今日を第一歩として、行草の中にも金文の筆法を取り入れれば、これまでと違った味が出てくるのではないのでしょうか。今日の講習だけで終わるのではなく、これからも金文を学び続けてほしいとお話がありました。

終わりに副会長の赤澤先生の謝辞をもって充実した講習会の幕が閉じられました。

平成十六年度講演会

書展部副部長 斎藤 一吼

「上海博物館新収最善本淳化閣帖と碑法帖入門」

講師・東京学芸大学非常勤講師 伊藤 滋先生



掲載することが多いということである。講演会当日の会場は当然のことながら、満席であり、立ち見で受講される方が目に付くほどの盛況ぶりであった。

講演の内容は碑法帖についての知識が浅薄な私には難解なものと思い、開始までは、半ば諦めていたが、画像を映しながらの説明であったため、内容としては高度なものでありながら、理解しやすい講演であった。

上海博物館新収最善本淳化閣帖とは民国年間にコロタイプで影印されたものの祖本であり『北宋拓淳化閣帖』(司空公本淳化閣帖)のことを言う。伊藤先生は上海で書法芸術学術鑑賞会の席上でこれを鑑賞され、コロタイプ本と比較し、いくつかの疑問点を持たれ、そのいくつかの点について肅府本淳化閣帖と比較し解説をされた。

疑問点の一つとして、司空公本は草書字画の筆勢及び用筆に差があり、字画や用筆に誤りがあることを指摘された。漫然と法帖を眺めている私などには、とても気が付くことができない指摘である。



「理」の「里」の部分、最終画に移る部分。「情」の「青」の部分、縦・横・横の用筆。「得」の「日」の部分の用筆。

次に司空公本淳化閣帖は拓調の異なる部分が多く見られるとのことであった。巻七では巻頭から始まり、巻六、巻八などとは、拓調が異なる箇所十数頁見られ、これが鮮明に見分けることができるとのことであった。

また、「銀錠紋」について触れられた。銀錠紋とは木版を用いた際時間経過に伴ったひび割れを補強した銀錠の跡のことである。銀錠紋は「北宋原刻原拓」であることの重要な根拠の一つであり、これがあることにより、「北宋原刻」の晩拓とされている。しかし、この銀錠紋の拓調が不自然であり、巧妙に拓



『司空公本淳化閣帖』卷八伏想清和帖 銀錠紋部分



紙を貼り付けた可能性があることを指摘された。

この講演の前後に三井文庫・書道博物館・東京国立博物館で拓本展が開催されていた。公演後に早速足を運んだ人も多かったことと思う。折りに触れ、時間を有効に使い、本物に接することの必要性を感じさせられる講演であった。

副会長の紹介

平成十六年度総会で選出された副会長の方々です。

鈴木 源泉氏
(再任)柿沼 翠流氏
(新任)赤澤 豊氏
(再任)

平成十六年度連盟展

理事 田中 暁亭

平成十六年度
栃木県書道連盟会員展開催

平成十六年度栃木県書道連盟会員展が、去る四月二十三日（金）から二十六日（月）までの四日間、栃木県総合文化センター第三・第四ギャラリーで華やかに開催されました。今年は昨年より約一ヶ月会期が早まり、準備や出品者等への影響が懸念されましたが、早めの対応で乗り切ることができました。



今回の出品数は三六八点で昨年より三点増えました。四月二日現在の会員数が八六〇名とのことです。出品者の割合は四十三%になります。今年は二月に女流展が第二十回記念展となり連盟役員展が併催され盛会でした。その後の会員展までの期間が短かったといえ、あと少し数が増えてもよいような気がします。今回出品できなかった方は次回に日頃の錬成の成果を発表して頂きたいものです。

会員展の会場は熱気溢れる作品が沢山出品され参観者を満足させたことと思います。勿論書道連盟はいろんな会派・社中の方が参加され、研鑽し出品してきておりますので評価は一樣ではありません。それぞれの会派・社中や個人が、それぞれに目標をもって書の美を追求してきているものと思います。技術を練磨し感性を昂揚し表現方法を身につけてきていることでしょう。この会員展の良さは公募展のような入選や落選はありません。選拔展でもありません。そういう意味で自由な発表の場といえます。一つ一つの作品がそれぞれに主張していることが望ましいのではないのでしょうか。会場を見わたすと豪快な作品、繊細な作品、丹念な作品そして飄々とした作

品など多彩な表現が見られました。

今年度の連盟賞の審査は、総会後に行われる記念講演の講師である都立南平高等学校教諭・東京学芸大学講師伊藤滋先生にお願いいたしました。

今年度の栃木県書道連盟賞は次の通りになりました。

井上幸枝（南河内町）「見たせば」

倉持玄風（小山市）「銭塘西湖」

篠崎無関（宇都宮市）「拙誠」

伊藤先生は古法帖・拓本を沢山お持ちで、その室号を木雞室といっています。今回は特別企画として先生の収蔵されている貴重な古法帖・拓本を展示いたしました。

展示目録

①殷契卜辞拾遺

②散氏盤精本

③漢 曹全碑 併碑陰（乾字未穿旧拓精本）

④缶翁旧蔵 乙瑛碑

⑤定武本蘭亭序（旧精拓）

⑥旧拓 孫秋生造像記

⑦明拓 雁塔聖教序

⑧旧拓 争坐位稿精本

⑨枯樹賦 三種

⑩淳化閣法帖（六卷）上海博物館複製

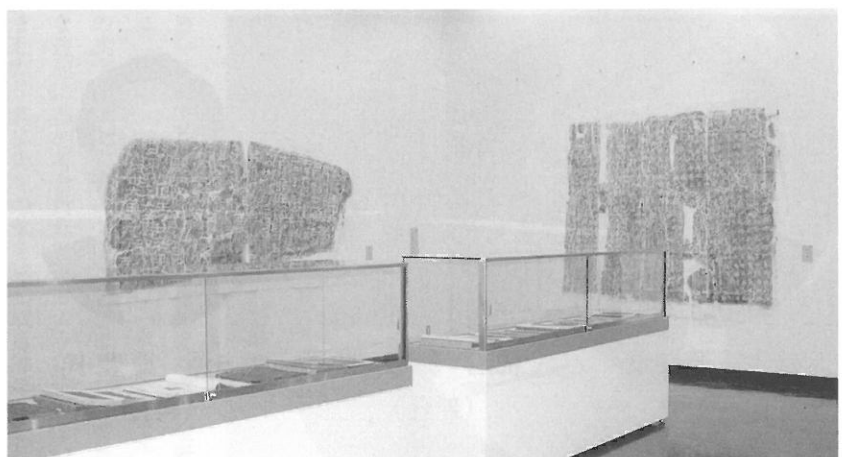
⑪楊淮表記

⑫石門頌

⑬石門銘

⑭開通褒斜道刻石

最後に今回の会場設営・飾り付けは書道連盟の書展部が中心となり企画運営し、当日は



他の役員及び一般会員からの応援を得て無事終了することができました。お手伝いくださった先生方及び会員の方にお礼申し上げます。ただ、反省として、展示・飾り付けの時の係の人数と後かたづけの係の人数が少なく班編成に苦労しました。次回は皆様方のご協力をお願い致します。

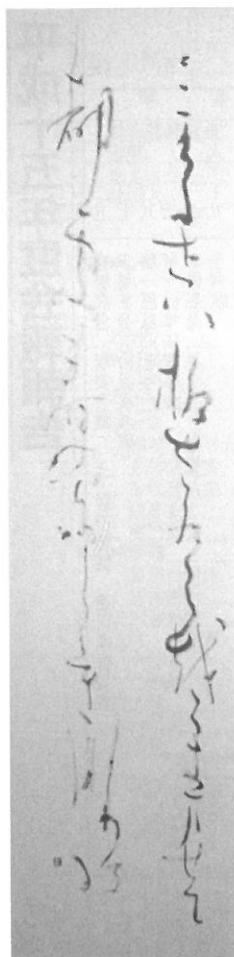
平成十六年度連盟賞 受賞のことば

井上 幸枝

この度は、伝統ある県書道連盟において、古舟賞を受賞させていただき、ありがとうございます。役員先生始め、審査に当たられた伊藤滋先生に心より御礼申し上げます。

大学時代からかなを学び始めましたが、その師の残してくれた愛情と数々の教えを忘れることはありません。そして、今も、宝ともいえる大切な人々がいます。その人々から享受する書への情熱や教えに接することも、私を書に向かわせる原動力となっているものです。

制作に当たっては、大好きな森田竹華先生の図録を見ることが多く、そこから何か不思議な力を頂いています。簡素・自然・大胆な表現を目指しておりますが、未だ思うようになりません。書というものの、ほんの一部分しか分かっていない私です。



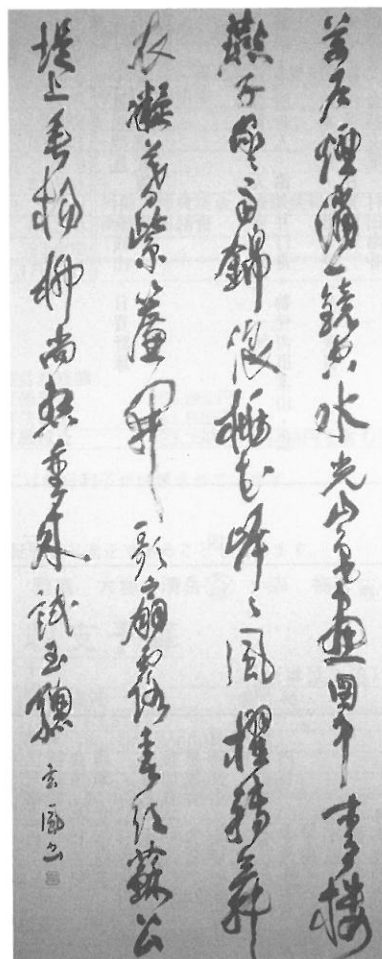
連盟賞「見わたせば」 井上 幸枝

倉持 玄風

この度は、思いもよらぬ連盟賞の榮譽にあずかり感謝申し上げます。

伝統ある連盟において受賞の報は拙作を恥じる思いの出品に光明と指針をいただき慶びと驚きでした。これも一重に連盟役員先生始め今回審査にあたりました伊藤滋先生に心よりお礼申し上げます。私は読売展、日展と活動の場を求めてきました。ともすれば「書」

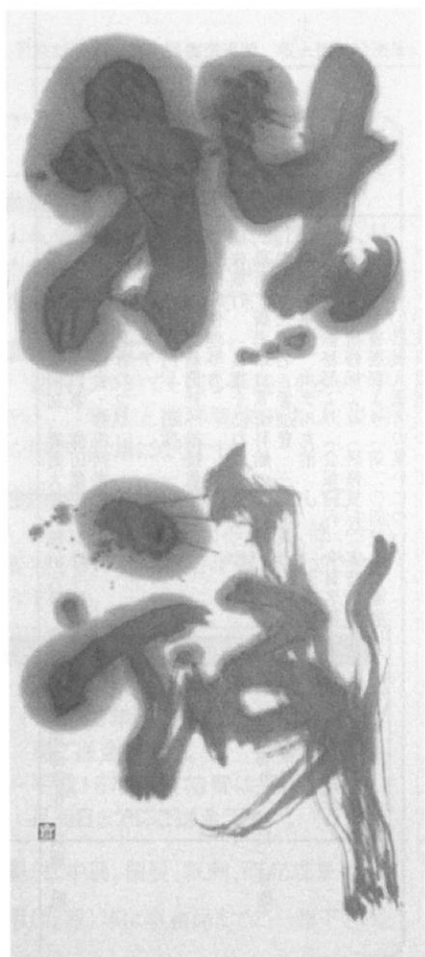
これからも書を、地道に続けて行くことが目標です。連盟の皆様のご指導よろしくお願ひ申し上げます。



連盟賞「銭塘西湖」 倉持 玄風

のもつ広さ、深さ、責任などに埋没しそうになります。そのような時こそ多くの人に励まされていることを感じさせられました。これを機に尚一層の努力と精進を重ねて参りたいと思います。今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。有難うございました。

篠崎 無関



連盟賞「拙誠」 篠崎 無関

此の度は思いがけず連盟賞を頂戴することとなりました。本当に有難うございました。諸先生方、諸先輩方のご教示の賜と深甚なる謝意を申し上げます。

また、この賞は「川俣古舟賞」であるとの由、お世話になった古舟先生や、師であった故前田秀利先生にも、少しは恩返しができたかと、うれしく存じます。「あんな拙い作でよく入賞したな。」とお二方とも笑っていらつしやるかもしれません。

さて、先日奥日光を歩いていると、見知らぬハイカーの方が「ここにヒカリゴケがありますよ。」と教えてくれ、珍しさにしばし眺めていてふとこう思いました。一年のこの季節だけ、しかも気づく人も少ないであろう場所です。不思議な光を放っている。自分もこんな書が表現できたなら案外幸せなのかなと。生来、不器用な上に怠け者の私ですが、たとえわずかでも自分なりの光を放てるよう筆を持ち続けていきたいと存じます。色々とご指導頂けたら幸いです。

[illegible]

平成15年度 収支決算書

〈収入の部〉

(単位:円)

項 目	予算現額			収入済額	比較増減	備 考
	当初予算額	補正額	予算額合計			
1 前年度繰越金	622,831	0	622,831	622,831	0	
2 会費	3,900,000	275,000	4,175,000	4,175,000	275,000	5,000円×835口
3 基金より	0	0	0	0	0	50周年基金より
4 雑収入	169	235,288	235,457	235,457	235,288	タックシール・懇親会費
合計	4,523,000	510,288	5,033,288	5,033,288	510,288	

〈支出の部〉

項 目	予算現額				支出済額	残 額	備 考
	当初予算額	補正額	流用額	予算額合計			
1 総会	100,000		0	100,000	86,763	13,237	会場費等
2 展覧会費	970,000		△41,943	928,057	928,057	0	
会員展	670,000		△78,403	591,597	591,597	0	会場費・案内葉書・印刷他
女流展	300,000		36,460	336,460	336,460	0	20回記念展
3 会議費	1,110,000		△118,990	991,010	962,550	28,460	
顧問・参与会	70,000		△23,940	46,060	35,500	10,560	
正副会長会	180,000		△118,990	61,010	57,233	3,777	
常任理事会	280,000		23,940	303,940	303,940	0	
理事会	330,000		20,423	350,423	350,423	0	
専門部会	250,000		△20,423	229,577	215,454	14,123	総務・書展・研修
4 研修費	650,000		9,203	659,203	659,203	0	
実技講習会	550,000		42,678	592,678	592,678	0	講師謝礼・参加者昼食費補助等
研修旅行	100,000		△33,475	66,525	66,525	0	新潟方面研修
5 地区活動費	100,000		△9,203	90,797	82,268	8,529	
6 通信・印刷費	950,000		0	950,000	898,239	51,761	
通信費	300,000		202,009	502,009	502,009	0	
印刷費	650,000		△202,009	447,991	396,230	51,761	
7 渉外費	320,000		160,933	480,933	480,933	0	外部団体負担金・交際費等
8 事務局費	300,000		0	300,000	248,830	51,170	事務関係諸費
9 予備費	23,000		0	23,000	0	23,000	
合計	4,523,000			4,523,000	4,346,843	176,157	

収入決算額 5,033,288

収支決算額 4,346,843

差引額 686,445

→ 次年度繰越金へ

1. 50周年記念行事会計残額

前年度繰越金

2,113,244円

本年度決算額

653,730円

次年度繰越金

1,459,599円 (利子85円を含む)

3. 松島堂寄附金 (未使用)

501,406円

2. 古舟賞会計残額

前年度繰越金

155,262円

本年度決算額

31,920円

次年度繰越金

123,350円 (利子8円を含む)

※各残高には銀行利子が加算されています。

会計監査報告

平成15年度 栃木県書道連盟 収入支出の決算について、4月2日に監査した結果、使途・決算書・証憑など適正であることを認めます。

平成16年 4 月 4 日

監事 大塚 清岳 小森 梅壽

事務局からのお願い

・会員の入退会について

入会を希望される方は、地区理事、社中代表者または本人が事務局に書類を請求の上手続きをとって下さい。

・退会について

退会についても同じ手続きをとって下さい。二年以上維持費未納者は、規約に基づき除籍になります。

・住所変更、住居表示変更について

住所変更、住居表示変更、姓、号の変更があった時は必ず事務局までお届け下さい。

会計について

重要事項につき必ず読んで下さい。

・平成15年度分までの未納者は至急ご送金下さい。

・平成16年度維持費は平成16年9月30日までにご送金下さい。

・慶(社中展、個展、叙勲、研究成果等)

・用(計報)等は事務局までご一報下さい。

平成16年度 収支予算

(単位:円)

〈収入の部〉

項 目	本年度予算額	前年度予算額	増減	備 考
1 前年度繰越金	686,445	622,831	63,614	
2 会費	4,050,000	3,900,000	150,000	5000円×810口
3 基金より	0	0	0	
4 雑収入	63,555	169	63,386	タックシール等
合計	4,800,000	4,523,000	277,000	

〈支出の部〉

項 目	本年度予算額	前年度予算額	増減	備 考
1 総会	100,000	100,000	0	会場費等
2 展覧会費	1,050,000	970,000	80,000	
会員展	650,000	670,000	△20,000	講師謝金・会場費
女流展	250,000	300,000	△50,000	
関連書展	150,000	0	150,000	
3 会議費	1,100,000	1,110,000	△10,000	
顧問・参与会	70,000	70,000	0	
正副会長会	100,000	180,000	△80,000	
常任理事会	300,000	280,000	20,000	
理事会	380,000	330,000	50,000	
専門部会	250,000	250,000	0	
4 研修費	650,000	650,000	0	
実技講習会	570,000	550,000	20,000	講師謝金・会場・昼食補助
研修旅行	80,000	100,000	△20,000	案内印刷・写真等
5 地区活動費	100,000	100,000	0	
6 通信・印刷費	950,000	950,000	0	
通信費	400,000	300,000	100,000	各種行事案内送付等
印刷費	550,000	650,000	△100,000	各種行事案内印刷等
7 渉外費	350,000	320,000	30,000	外部団体負担・手当等
8 事務局費	350,000	300,000	50,000	事務関係諸費
9 予備費	150,000	23,000	127,000	
合計	4,800,000	4,523,000	277,000	

収入予算額 4,800,000

支出予算額 4,800,000

差引額 0

寄稿

江戸期下野の書人達を探る

理事 石川 善克

【はじめに】

先ごろ「来栃一二〇年記念 山岡鐵舟遺墨展」が「とちぎ山岡鐵舟遺墨展実行委員会」によって、栃木市文化会館で開催された。わずかに四日間の会期であったが、大勢の来館者があり、観覧者の熱気で連日の賑わいを見せていた。私も二回ほど会場に足を運んだが、通りいっぺんの展覧会ではないことを実感させられた。

どうして、このような盛況をみせたのだろうか。その要因は鐵舟作品の所蔵者が鐵舟に対して特別な愛着があること、それと鐵舟を長いこと研究している遺墨展事務局の寺内進氏の旺盛な研究心の成果によるものである。

そこで、特別な愛着を持っている人々の話を紹介して、以後の本論の橋渡しとしたい。

目玉の展示の一つとなる神社の幟旗は、明治一八年一〇月に栃木市野中町の長宮神社に氏子達が奉納したもの。全長九、二メートル幅一メートルの長幅で、布地二枚（一对）である。氏子の青年たちが数日を費やして準備を整え、みご（稲の穂の芯）で作った超大筆を持って書いたという話を青木畔泉氏から聞いた。畔泉氏は祖父の懐旧談のひとつで子供の時から聞かされていた話だという。

もうひとつ、「撃剣道場」と雄渾な筆致で書かれた扁額について。これは鹿沼市の入江二峰（入江真海氏の父）が所持し伝えたきたもので、戦後に鹿沼市へ寄贈されて市の剣道場に掲げられてきているという。鹿沼市にも鐵舟の足跡が残されていたことがわかる。

【鐵舟の来栃と揮毫】

山岡鐵舟は明治一五年に宮内庁御用掛を最後にして官を退く。時に四七歳である。そして正四位に叙される（遺墨展図録による）。退官した鐵舟は、直ちに東京の谷中に葵正親世音菩薩を勧請し「全生庵」なる寺を建立する。維新時に、国事に奔走し殉死した人々の菩提を弔うためである。いっぽう、明治一八年にはこの全生庵に剣術道場の建築を企図する。鐵舟のもう一つの側面が剣道家で流派の領袖であることは、よく知られている。それ故に道場建築資金の拠出を広く世間に求めている。

今般 谷中全生庵葵親世音道場建築勧進の為 各府県下へ派出致させ候間 右件宜敷御依頼申入候也

明治一八年六月廿五日

山岡鐵太郎

各府県各宗寺院御中

(遺墨展図録57)

また、栃木市の小平重太宛では、東京谷中全生庵建築勧進の義に付 厚御配慮下され候故伝え承り 大慶此事に存奉り候（以下略）

(遺墨展図録58)

と、お礼状が届けられているのである。これには年記はないが全生庵の建築が、退官して直ぐであるから明治一六年の始めであろうか。

鐵舟の来栃は全生庵建立や道場の建築資金を得ることで、その対価として書画会を開いて作品の依頼に応じたことが、主な理由であろう。また、別に剣道指南の来栃もあって道場主との交流があり、書画会が開かれたであろう。鹿沼の入江氏との関わりからも分かることである。かくして、栃木市周縁との熱い交流が、百年後の今日の子孫達へと伝わってきたものであろう。

【書画会の案内状】

書画会の案内状とは前項にみるように、作品揮毫会の招待状といつてよい。江戸時代の後半になると江戸の近郊をはじめとして、地方に文化的な土壌が生まれてくる。蕉風俳諧の流行などは、文化流行の好例で各地に愛好者による連が生まれていった。川柳・狂歌・和歌・漢詩等の詩歌、音曲や花や茶や行儀などの稽古事、花木栽培や盆栽等の風流、書画の嗜み等で地方の旦那衆を中心に広がりをもてきた。そして、これはしばしば中央の文化の摂取の形で現れる。宇都宮で行われた天保一二年（一八四一）の書画会の案内状を見てみよう。

文晁華山鶴屋椿山四大家展観会
閏正月廿日 宇都宮清嚴寺に於いて開筵
晴雨を論ぜず 右四大家の外近代名幅を

御携え御賞臨希い奉り候 今後展観品目呈上す 尤も本日雑費並びに目録出版料掛り候に付き 金五拾足らず御持参希い奉り候（原文を和訳）

本日諸先生席上揮毫

催主 黙雷稲木環中再行
補助 澹如菊地教中

(栃木県立美術館紀要6)

この案内状の閏正月は、閏月が正月の年であるので天保一二年正月で西暦一八四一年であることがわかる。江戸からやって来るのは谷文晁（天保一一年一二月七八歳歿）・文晁の門人渡辺華山（天保一二年四九歳歿）・同じく文晁の門人で下野出身の高久鶴屋（天保一四年四九歳歿）・華山の門人の椿椿山（嘉永七年（一八五四）五四歳歿）である。迎えるがわは宇都宮の觀泉寺住職の稲木黙雷和尚（明治八年（一八七五）七五歳歿）、二〇歳のときより鶴屋の門人である。それに江戸へ店を出して豪商となった佐野屋孝兵衛（菊地淡雅）の子で、年若い菊地教中（文久二年（一八六二）三八歳歿）である。

中央画壇の著名人が宇都宮へ四人もやって来るということは、宇都宮のみならず近隣の書画人にとって高い技術の学習の場であり、書画を求める好機である。これには佐野屋孝兵衛の宇都宮と江戸を結んだ後援者としての存在があったからであろう（同前美術館紀要）。

この四大家展観会の案内状は近隣の喜連川・茂木・壬生藩などの文人墨客達へと届けられたであろう。ただ、これを前にして谷文晁が歿しているの、開筵（開催）は果たあつたのかどうかはわからない。

【諸家人名録】

表2 当時書家人名録の下野の文化人
分野別業種

部門	分野	延べ人数 ()内専業者
学問	経学 算術	3 (1) 1
武道	剣道	4 (1)
文芸	和歌	2
	俳諧	17
	詩書	7 (1)
	絵画	10 (2)
遊芸	狂歌	11
	盆景	16 (1)
その他	碁道	1
	華道	23 (1)
	医業	4 (3)
	風流	33
合計	礼道	1 (1)
	合計	134 (11)

猶、ホトンドヲカ
ルベシ、後編ニ改
梓上スベシ。
凡例の抜粋を引用
しものだが、記録は
十分な調査と云いが
たく、漏れた人たちは
後に補うものとして
いる。江戸の諸家

表1 当時諸家人名録の下野の文化人

地域	人数
藤岡町域	35
佐野市域	14
小山市域	10
足利市域	6
栃木市域	5
大平町域	4
地域不明	4
合計	78

江戸ノ人名録に有ル人ヲ載セズ、四州ノ
大儒諸名家風流に聞エアル人、又雷名ナル者、
つぎに、これらの業種別分野を群馬県史に
ならつて記す。①学問では国学・経学・算
術・暦学、②武道では剣道・柔道、③文芸で
は和歌・俳諧・詩・書・絵画・狂歌、④遊芸
では盆景・印刷・碁・茶道・華道、⑤芸能で
は謡・音曲、⑥その他では医業・風流・礼道
をあげている。

東都(江戸)の風聞は下野国にもまたたく
まに伝わる。黒船の浦賀来航のようすを知ら
せる古文書が、村方に今も保存されているこ
と等で知ることが出来る。はじめは村の役人
層だけが読み書きができれば事足りるとした
ものが、文化・文政年代(一八〇四―一八三
〇)には手習塾が急速に百姓や町人に広まっ
た。文化年代から幕末にかけて下野国内の手
習塾の開塾は四四九を数えたという(県史
6)

商品作物の栽培、特産物の生産などが盛ん
になり、商業や交通が一段と活発になると、
家業や役職に平行して余暇の生きかたを求め
る風潮ができる。文化活動が一部の階級の
人々に止まらず、民衆文化へと発展していく。

評判記や番付表や案内記など、文字を通じて
の文化がすみずみまで浸透するのである。

下野国藤岡の大塚隣柳齋、山楽(大塚平左
衛門)は上野国前橋の奈良一徳齋、峻沢と文
政八年(一八二五)に、『上野下野武蔵下総
当時諸家人名録』を上梓する。四カ国に跨が
る文人諸家の、携わる業種・住所・号や字な
どを載せる。その数は四百人余りで、利根川
中流域から上流域に居住する人達である。つ
まり利根川の舟運で結ばれた文人たちといえ
よう。江戸時代の交通の主体が、舟運によっ
て成り立っている、この交易圏で一地方
の文化人名簿が作成されたのである。国別に
人数をみると、上野国が一番多く、ついで
武蔵国、つぎに利根川支流の渡良瀬川流域
で下野国となり、下総は少数である。

については、江戸人名録に任せて載せないとい
もっている。

では、下野国の諸家はこうなっているの
か。

全部で七八名が収載されている。表1に地
域別に、表2に業種別に示してみた。先に述
べたように渡良瀬川流域の藤岡町とその周辺
の大平町・栃木市・小山市と佐野市・足利市
となる。藤岡町に驚くほど集中して多いのは
編集者の大塚隣柳齋山楽が藤岡に住んでいる
ため、よく知り得る立場にあったからと思
われる。表2をみると、部門の分野別では現
代に引き継がれているものばかりと言ってよ
い。書も六番目にランクされている。多くの
人は本業をもつていて余暇にこの道に励み芸
を磨くといったものであるが、内一名が本
業として記されている。書では三名おり、佐
野の天明の渡邊元次郎(一黙庵東園)、大平
の榎本の藤高琴蔵(明強齋琴蔵)で、栃木の
睦玄亮(遠観堂玄亮)は詩書画にわたつて業
としている。医業では三名が業とし(小山・
足利・不明)、盆景(盆栽)で一名(小山・
藤岡)・学者(学塾)で一名(佐野)、剣道で
一名(佐野)、華道で一名(栃木)、礼道で一名
(不明)である。

佐野の中小に住む学者の赤尾小四郎(鷲
洲・秀穀)はこの人名録の序文を書き、文末
に「鵬齋門人赤尾秀穀識」としている。鵬齋
とは亀田鵬齋のこと、江戸にあって詩書に優
れ越後の良寛との交わりは有名である。栃木
県歴史人物事典によれば、赤尾の子の清三郎
は出流山拳兵(慶応三年、一八六七)に加わ
り幕府軍に捕らわれ斬刑にあう。赤尾塾で漢
籍と書を赤尾の後を継いで教えていた。

この人名録で、今に名を遺している人は少

ないであろうと思う。赤尾鷲洲もわずかに知
られるに過ぎない。そうは言っても江戸時代
の終り頃とはいえ、これほどの文化が地方に
根づき、現代へと繋がっているのである。
近ごろ、美術館や博物館が各地に建てられお
のおが蘊蓄を傾けて、企画展を開いて競っ
ているようにみえる。新聞の木曜日の「展示
館だより」をみると、主な館数だけで五〇を
数える。県内で載るのは約一〇館であるが、
町村の資料館や民間の展示ギャラリーを数え
たら二倍をゆうに越えよう。とはいえ書に関
する企画展示は寂しい。最近になって東洋美
術のジャンルで、書画―文人墨客―に対して、
少しだが日が当てられるようになったよう
はある。

【般若塚・黒崎家の扇面コレクション】

芳賀町般若塚の黒崎家は、江戸期から代々
治部右衛門を襲名して、田畑六、七〇町歩を
持ち、油や酒・醬油などを江戸へ出荷する
という富農であった。この黒崎家に蔵されてき
た扇面は全部で四七三面もある。二〇〇二年
(平成一四)一月に小杉放庵記念日光美術館
でそのうちの百点余りが展示された。いづれ
も文化文政から天保期(一八〇四―四四)ご
ろ収集された作品である。

たまたま、私の属する藤岡町古文書研究会
が読解を依頼されたため、私にとっては忘れ
られない貴重な眼福を得させてもらった。
描かれた内容は、漢詩・和歌・俳句・詩文な
ど各種あり、書体も楷行草篆隷仮名と各体あ
る。自在に筆を駆使しているので読解は難航
し、とくに、落款は厄介であった。鳩首凝議
すること数知れずだった。

図1-3に見るように、扇子の骨はなく扇
形の紙に書かれている。大きさは上弦が四七

表4 黒崎家扇面の諸家(抽出)

居所	図録No	人名・号等	扇面の題名や内容	身分や役職
烏山	A150	大久保 忠成	画、紅葉に鳥図	烏山藩主
	A042	大久保 忠勤	書、七言絶句	烏山藩太夫
	A133	若林 昌恭	書、「胸中廓然〜	烏山藩江戸家老
	C103	大久保次郎左衛門忠矩	書、七言絶句	烏山藩国家老
	C047	平野清左衛門	画と賛 枯木鳥図	烏山藩年寄家
	C056	志村 信興	画、紅葉小禽図	不明
	D003	吉田 勘四郎	書、感懐文	烏山藩年寄家
	A024	喜連川 恵氏	画、鳥画貼交図	喜連川藩主
喜連川	A152	喜連川 彭氏	画、富岳図	喜連川藩家中
	B128	津村 雨林	画、秋景山水図	不明
	C064	逸見 為庸 号後山	書、七言絶句	喜連川藩家中
	A095	本多 世義	画と賛、墨竹図	宇都宮藩太夫
宇都宮	C088	英巖寺和尚 王老師	書、七言二句	英巖寺僧
	C111	高宮 雲僊	書、五言絶句	宇都宮藩家臣
	C125	藤田 安正 号帛川	画、米法山水図	宇都宮藩家臣

表3 黒崎家扇面の内下野の諸家

地域分布	扇面数
烏 山	2 2
喜連川	1 0
宇都宮	8
茂 木	7
湯津上	7
日 光	5
芳 賀	3
真 岡	3
黒 羽	3
市 貝	2
足 利	2
大田原 氏家	各1
二宮 西方	
小山 不明	
合 計	7 8

（八センチメートル、下弦が二一センチメートル前後、縦幅一七〜八センチメートル、すべて同一規格と言ってよい。
書かれた内容は書だけのもの、画だけのもの、書画を合わせたものなど多様である。漢詩文あり、和歌あり、俳句ありと各人各様で

あり、節氣や年中行事などの関わりで作成されたものでもない。
四冊の画帖に分類され各々に題箋が貼られている。①『扇譜、諸侯』、②『扇面譜、東都』③『扇面譜、諸洲』④『剥落力不明』となっている。①は大名旗本といった人達の書のもの、②は東都（江戸）の人たち、③は諸

洲の人たち、下野や常陸をはじめとして広範な国々に広がる。北は津軽、南は肥後の熊本、長崎などにいる人々である。

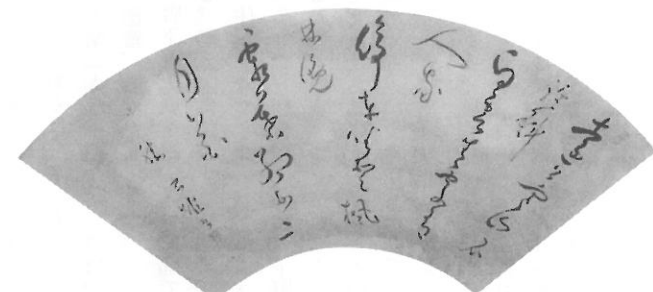


図1 大久保次郎左衛門忠矩（烏山）
「個人蔵・小杉放菴記念日光美術館（寄託）」



図2 逸見為庸（喜連川）
「個人蔵・小杉放菴記念日光美術館（寄託）」



図3 高宮雲僊（宇都宮）
「個人蔵・小杉放菴記念日光美術館（寄託）」

朝鮮国、清国の人もある。大名、旗本、武家、僧侶、神官、書画家、儒者、役者、狂歌、俳人、名妓と幅広い層である（小杉放菴記念日光美術館作成の図録による）。
扇面の目録から下野の文人墨客を抽出して見ていくこととしたい。表3にその地域と人数を、前記の日光美術館作成の図録にならって表にしてみた。収集に当たった黒崎家の当時の交流の範囲も分かっている。藩主大久保忠成（三万石）を始めとした藩の重臣たちがほとんどである（表4）。
大久保次郎左衛門忠矩（一七六六〜一八五一）は藩主の同族で在藩の家老である。晩唐の詩人杜牧の詩「山行」を書いている。「遠く寒山に上れば石径斜めなり〜」で始まる七

言絶句である（図1）。この詩は日本人の愛唱詩でもあったのだろう。現在でも展覧会場で、この詩を書いた作品は多い。草書に熟達した筆致は、やはり王羲之の習練によるもので、その上日本的な暢びやかな情懷をもった作と思う。四句とも書き出しを筆太にして、六字と七字目は行を替えて、軽やかな筆で終わる。同じようなパターンで四句をあしらってたくみに全体を引き締めている。唐風の骨格と仮名的な艶麗さも加わっている。
喜連川関係も藩主やその家中武士たちが多い。喜連川藩は五〇〇石の小藩だが、足利氏の流れをもった格式の高い藩として幕府から遇されている。
逸見為庸（一八一八〜九三）は号を後山といい、幼いときから漢学を学んだ俊才であっ



図4 石塚倉子作の花短冊
「個人蔵・藤岡町歴史民俗資料館（寄託）」

以上、紙数も限られているので、扇面の作者の考察は、書作品のごく一部に触れる程度になってしまった。
なお、二〇〇一年二月二三日の下野新聞文化欄に「扇面」に映る「近代を拓く風」と題した企画展示の紹介記事がある。
【国風歌人石塚倉子】

たという。藩政に務め農村復興に力を尽くす。明治になつては逸見塾で子弟の指導をした（喜連川町史）。扇面は「是非不到野溪邊」の七言絶句、一行目が四字、二行目が二字で四字二字の同じパターンを繰返すところは、前記の大久保と同じやり方だ。書風は米市や蘇軾（宋末）や董其昌や文徵明の（明初）の唐様書きである（図2）。これらの中国の書人のものは石堀本で出版されているので、多くの人が学んでいる（江戸出版書目）。
宇都宮関係も前二藩同様藩の家臣が多い。藩主は戸田氏で当時は七万石余あり、下野国の大名では一番の藩領をもつ。
高宮雲僊（一七六一―一八二六）は戸田氏の家臣で、戸田氏の島原在封から宇都宮転封によって宇都宮に移る。藩の学校を創立するに及んで、書札の師として江戸藩邸から移り住むようになった。宇都宮市史には、雲僊は書について「深く三王（羲之と献之）を学びまた、魏晉の諸家を学び尽くしたという。齊梁以後は書法一変し、唐代にありては取るべきは顔魯（顔真卿）のみ」とし、宋代以降の

書は認めなかったという。また蒲生君平と交友が深かった。安養寺（宇都宮市材木町）に雲僊の墓碑があり、藤田安正（号は帛川）が碑文を書いている。扇面は「嬌茅石鮮の中、優女呼びて起たず」の五言絶句を、四字一字、四字一字と行を繰り返して、前の二人と様式は変わっていない（図3）。
ここで、触れておかなばならないのは、黒崎家がどうやってこれらの扇面を収集するこゝとができたのか、である。一地方の豪農の趣味だけでは難しかったであろう。そこで、当時の文化の社会動静から理解することが、このコレクションの存在理由を明らかにする鍵となる。図録の解説部分の要約にすぎないが、いくつかの答えを記しておく。①夏期を前にして粋な若者が、売り声をあげて扇子の台紙を売り歩く習慣があった。②書画会の頒布では扇面も売られた。③黒崎家を訪れる文人から譲られた。④贈答品の一つであった、等々である。こうして、幕末期の社会は大名も武士階級も百姓や町人と、身分の垣根を取り払って、文人趣味で一致して楽しんでいたと言えよう。

県立文書館の企画展「文書で見る下野の女性」（一九九四年（平成六）秋）が開催されたが、その目録をカラーで飾ったのは、石塚倉子像と倉子遺作の「花短冊」である。本稿の最後になってしまったが、ここで女性の書人について取り上げる。なお、国風とは万葉歌を始めとする日本古来の和歌をいう。

宝暦六年（一七五六）二月に七〇歳の倉子は「私家室八鳥」という歌集を江戸から出版する。全五冊で一四九丁あり、三一九首と長歌一首を載せる。序文を書いたのは、歌と書で名のある荷田宿禰在満と朝散大夫藤原友淳、跋文は服部服子仲英（服部南郭の養子詩文書画）である。

石塚倉子の先祖は中世には小田城主（茨城県筑波郡）小田氏の一族であつて、歌道に優れていた。小田氏は常陸の佐竹氏に破れて（一五七四 天正二年）、倉子の先祖は下野にうつり、皆川藩主の和歌の朋友となつたという。倉子の四代前の石塚宗興の時である。そして、富吉村（藤岡町大字富吉）に帰農し代々名主を勤めてきている。また、歌道も神職もつとめ、古河藩の扶持人（禄をもらう）にもなっている。歌詠み人としての扶持（五人扶持）であろうか。また、武士に倣う形の準士とも記している（古河市史）。石塚家では、宗興以来伊勢物語と源氏物語は家伝の書物であると伝えている。

石塚倉子を歌道の後継者であり、当時の貴重な女流歌人と記しているのは、服部南郭である。南郭は門人七人を率いて石塚家を訪問したことを書き残している（南郭服元喬 稲仲明に与うる書、古河市史）。そして、倉子の人柄を「溫柔で静淑、才を顕さず、女性の徳と文質を備えている」と評している。一行

は案内をうけて、太平山（栃木市）に登るなど楽しむが、帰途大雷雨に会い帰着は夜中になつてしまったという。また、石塚家へ南郭等が揮毫の腕を振るつた様子も記している。倉子の書は図4の花短冊にみるように古来の仮名書道の伝統を受け継ぐもので、確かな連綿体で書かれている。なお、大平町西山田の清水寺の滝の観音堂に納められた歌五首の木額は、観音信仰にこめられた倉子の心情を映しているし、その筆跡も倉子を書いたものとして貴重である。

《主要参考文献》

- 来栃一二〇年記念 山岡鐵舟遺墨展（平成十六年刊、とちぎ山岡鐵舟遺墨展実行委員会）
- 栃木県立美術館紀要6（一九七八年、栃木県立美術館）
- 上野下野武蔵下総 当時諸家人名録（文政八年刊、隣柳齋山樂複写本）
- 般若塚・黒崎家の扇面コレクション（二〇〇一年刊、小杉放菴記念日光美術館）
- 石塚倉子遺著 室八嶋（昭和一四四年刊、栃木県立栃木高等女学校校友会）
- 栃木県史、群馬県史、宇都宮市史、烏山町史、喜連川町史、古河市史、藤岡町史
- 享保以後 江戸出版書目（平成五年刊、臨川書店）
- 大日本書畫名家大鑑（昭和九年刊、大日本書畫名家大鑑刊行会）
- 下野書画人名一覽（平成八年刊、渡辺達也編）
- 栃木県歴史人物事典（一九九五年刊、下野新聞社）

地区だより

(塩谷地区)

先人の功績に感謝

理事 五江渕霊水

「芸術こそ心を磨き、創造性を高め、情操豊かな人間性を培う心の教育の基本である。」という理念のもとに歩み続けてきた塩谷地区芸術祭が今年で第五十五回を迎えることになった。五年前に発刊された記念誌「塩谷の芸術50」には昭和二十五年に発足し、氏家町で開催された第一回から第五十回までの歴史や芸術祭を築き、支えてこられた先人達の努力と功績の足跡が綴られている。



現在の塩谷地区の書写書道教育、文化の発展はこのような先人達の御苦労と御尽力に支えられてきたことを、ここで改めて確認するとともに、心から敬意を表したい。

塩谷地区には現在、栃木県書道連盟に役員六名、会員六十名。下野の書展(下野新聞社主催)、代表作家四名、選抜作家十三名等、多数の書道人が県内外で活躍し、「塩谷地区は書道の盛んな地区」との風評がある。

塩谷地区は矢板市、高根沢町、氏家町にそれぞれ書道連盟が結成され、書展の開催や後進の指導など、地域の書道教育文化の振興発展のために活動を続けている。ここに昨年度からの活動の一端を記しておきたい。

◇第七回氏家町書道連盟展

- ・平成十五年十一月二十八日～三十日
- ・氏家町公民館一階ロビー
- ・出品者 十二名

◇第八回矢板市書道連盟展

- ・特別出品として氏家町長他五名
- ・平成十五年十二月二十二日～二十三日
- ・サンアベリア矢板
- ・出品数 一般四十三・学生百五十五・協賛二十 計二百十八名

◇第二十七回高根沢町書道連盟展

- ・平成十六年六月十五日～十八日
- ・栃木県総合文化センター
- ・出品者 代表作家 七名 選抜作家 二十七名

◇第五回塩谷地区書道十人展

- ・特別出品として高根沢町長他十一名
- ・平成十六年一月九日～十二日
- ・矢板市文化会館小ホール
- ・出品者 十三名

(大田原地区)

大田原市書道連盟

理事 長嶋 石城

かねてより懸案となっていた大田原市書道連盟が、平成十五年四月十二日発足した。かつて大田原市書道愛好会なるものがあつたが、およそ四十年ぶりの大同団結である。

初代会長には酒井真沙先生が満場一致で選出された。役員つぎのとおり。

顧問 印南雲流
会長 酒井真沙
副会長 村田幽香

理事 長嶋石城(事務局長兼任)
相田憲伺、印南峰雲、大高美砂
川上鳴石、河崎真翠

会計 遠藤桐花

監事 竹内梅雄、横田蘭花

会員は県書道連盟会員を母体として新たに募った結果、七十名に及んだ。

「本会は、書道愛好者相互の親睦を図り、大田原市文化の向上発展に寄与する」ことを目的としているので、初年度の事業として、「大田原市書道連盟展」を行うことになった。日程を調整して、会場確保のため早速那須野が原ハーモニホールへ出かけたが、利用者が多いため希望どおりにはゆかず、一月中旬になってしまい、厳寒の時節なので、積雪を心配した。

さて第一回大田原市書道連盟展を平成十六年一月十六日(金)～十八日(日)の三日間、市内の那須野が原ハーモニホール(第一・第二ギャラリー)で開催した。出品者は五十七名。漢字、仮名、近代詩文、大作から小品まで非常にバラエティーに富んだ書展となり、「楽しく見ることができた」という一般市民の声があつた。心配した降雪もなく好天に恵まれ、本連盟副会長長鈴木源泉先生、書展部長柿沼翠流先生を初め、三百名近い参観者があり、大盛会であつた。

また、懇親会では、自己紹介をして飲む程に酔う程に、なごやかな雰囲気の中で楽しく有意義な時を過ごすことができた。所期の目的は達せられた。今後役員一丸となつてさらに会員をふやし、内容を充実させていきたい。



高橋日儔先生の御霊安らかに

弔辞

会長 中野 永峰



いつも笑顔の先生でした (92才)



若き日の高橋先生

謹んで、高橋日儔先生のご霊前に捧げます。
平成十五年十二月十八日、突然の訃報に接し、私達は、ただ声を呑み、人生の無常と儚さに哀悼の情極まりなく切なる懷であります。

回顧いたしますれば、先生のご生涯は書道一筋の人生でございました。早くも旧制佐野中学生時代に、半田神来先生に三年間鳴鶴流の六朝風を学び、その後上京して、高千穂高商に進学の傍、成松碧巒先生に師事し書道に専念されました。昭和七年東京府立三商に奉職。昭和八年文検習字科合格を果されました。昭和二十年から昭和四十三年の定年退職迄

野女子高校にて書道教育に当られました。その間、県書道教育研究会副会長顧問、高等学校書道部会副会長顧問をなされ、昭和四十六年には県書道連盟会長顧問、県芸術祭審査員等を歴任されました。先生には該博な知識と豊富な経験をもって県書壇に多大な貢献をなされました。
先生は、長身瘦軀、飄々として夫子然たる風格にして、常に和顔愛語をもって人に接し、こよなく酒を愛し、ユーモアに富み雄弁で、先生の居る所常に笑いがあるといふ人気と情宜に厚い人格者でありました。そして、人生

意気に感じ、正義感の強い、如何にも明治人らしい気骨を持たれておりました。

先生の書作品について申せば、深く古典に裏付けされ、鳴鶴流を根底にした穩健篤実な書風で、宗教を漂わせる品格の高い作品でした。

あの眼鏡の奥の温かいまなざしを持った先生に接することはもう出来ません。先生には行年九十五才、正に天寿を全うされての大往生でございました。

私達は、書をもって公私共に努力なされた先生の精神を学び、栃木県書道連盟の発展に盡力いたすことをお誓いいたし、謹んでご冥福をお祈り申し上げる次第であります。合掌

平成十五年十二月二十日

栃木県書道連盟会長 中野永峰

県芸術祭書道展ガイド

会長 中野 永峰

年度	応募数	入賞選数	入選率	
11	375	226	60.3%	
12	368	222	60.3	
13	376	221	58.8	
14	370	261	70.5	掛け替え
15	398	275	69.1	〃

一、県展の書道部門の、作品展示可能数は、二二〇点です。

二、平成十四年から、入選者を多くするために、掛け替え制を実施。

(長年の、芸術祭運営委員、専門委員の交渉成立による。掛け替えには、書道連盟の役員が奉仕しています。)

三、入選率は、目下七十%以下に規制されています。

四、多数の応募者を期待しています。

五、出品票の記入は、楷書で、読み易く。(目録、キャプション作成に支障のないように)

六、題名は適確であること。(素材の核心語)

七、芸術祭賞は三点。準芸術祭賞は一点、奨励賞は一点。

七点の完了者は、芸術祭実行委員、芸術祭招待者、審査員の資格が得られます。

◎七点取得者の公募出品はご遠慮下さい。

事務局より

事務局長 大浦 舟人

平成十六年度通常総会

平成十六年度の総会は、四月二十五日(日)午後一時より二時半まで、栃木県総合文化センターリハーサル室にて開催されました。

開会に先立ち、進行を担当する総務部長の松本宜馨氏より当日の出席者が一三二名、委任状提出者四三三名と合わせて五六五名となり規約第二三条により総会が成立することが報告されました。中野永峰会長の挨拶の後、議長として刑部素心氏(市員町)が選出され議事に入りました。また、書記には吉田竹溪氏(宇都宮)・斎藤裕一氏(馬頭町)、議事録署名人には初谷秀山氏(葛生町)・下司香雪氏(宇都宮市)が選出されました。

【議事】

第一号議案

平成十五年度事業報告及び収支決算報告について

○監査報告

第二号議案

平成十六年度事業計画(案)及び収支予算(案)について

第三号議案

役員改選について

第四号議案

名誉顧問・常任顧問・顧問及び参与の承認について

編集後記

会報二十三号、ご覧ください。本連盟総務部員一同

第一号議案の事業報告については、十五年度が会員名簿、高校生顕彰、記念女流展(協賛役員展)など様々な事業に各専門部が一致協力して取組んだ年でしたので、本年度から各事業を関係の専門部ごとに分けて専門部長が説明する形で進行し、会計の山田雅子(宇都宮市)氏による収支決算報告に続いて、監査の小森梅寿氏(宇都宮市)と大塚清岳氏(宇都宮市)から監査報告があり、原案通り承認されました。

第二号議案の各事業計画についても先と同様に担当の専門部長(総務・研修・書展)から説明がありました。質疑に入って、桜井敬朔氏(河内町)から三つの提案がありました。まず、連盟の会員がかかわる各種書展の案内状に使用するDM用タックシールの提供についての質問ですが、既に要望がある場合は連盟全会員のタックシールは五千円にて提供しています。(収入は連盟の会計に繰り入れます。)必要な方は事務局までご連絡下さい。また、会員展の作品サイズに二尺×八尺(縦)を加えてはどうかという意見については書展部の方で検討するという事になりました。さらに、会員の若手育成についての提言がありました。また、高校生の顕彰という事業が、数年の検討期間を経てようやく実現まで漕ぎつけたばかりですので、研修部が中心になって先ずはこの充実を図りつつ、さらには広い視野で連盟の取り組みべき方向性を探っていきたいと考えます。総会という場において、建設的な提言が会員の声として出されたことは大変うれしく思います。

役員改選案を承認

第三・四号議案は、任期満了に伴う役員改選および顧問参与の承認の件ですが、原案通り承認されました。その結果、新副会長に柿沼翠流氏(矢板市)、新書展部長に常任理事の癸生川天遊氏(宇都宮市)、新常任理事に勅使川原素山氏(佐野市)、新理事には関口鶴情氏(足利市)、坂本芳久氏(今市市)、倉持玄風氏(小山市)、高橋金舟氏(黒磯市)、森田桂石氏(佐野市)、細川清一氏(真岡市)、大類天鶴氏(河内郡北)、小森聖子氏(塩谷郡)、小林桂華氏(下都賀郡)、新顧問として久津美碧洋氏(宇都宮市)、津久井汀舟氏(宇都宮市)、新参与として石田鶴邨氏(真岡市)、大塚清岳氏(宇都宮市)、生田目史雲氏(宇都宮市)、人見翠苑氏(今市市)が選出され、さらに新監事として大谷津紫水氏(宇都宮市)、新事務局員として渡辺司寶氏(鹿沼市)、穂山玉星氏(小山市)も承認されました。



会員展飾り付けに参集する会員諸氏

平成十六年四月六日(火) ホテル丸治 第一回専門部長会
平成十六年四月二十二日(木) 県総文センター 会員展
平成十六年四月二十三日(金) 二十六日(月) 県総合文化センター第三・四ギヤラリー 搬入・飾り付け 二十二日(木)
規格:仕上がり寸法 昨年と同様
賞:優秀な作品に対して「栃木県書道連盟賞」を与える。(受賞経験者を除く三点)
総会
平成十六年四月二十五日(日)
県総合文化センター リハーサル室
講演会 総会と同日・同会場にて
講師 伊藤滋先生
テーマ「上海博物館新収蔵最善本淳化閣帖と碑法帖入門」
懇親会(同日十七時 ホテル丸治 会費 六千円)
第一回常任理事会
平成十六年五月三十一日(月) ホテル丸治
第一回理事會
平成十六年六月六日(日)
各専門部会 一〜三回程度実施予定
第二回常任理事会
平成十六年八月二十六日(木) ホテル丸治
会報発行
平成十六年九月一日(予定)
県展入賞入選者のつどい
平成十六年十月三十一日(日)
会場 アビエ 会費 六千円
「県芸術祭会期十月二十三日(土)〜十一月二日(火)」
研修旅行
期日・内容・方面・参加費 検討中
※実技講習会同様、総会時にアンケートをとる。
第二回理事會
平成十六年十二月十二日(日)
高校生顕彰「栃木県書道連盟表彰」
十二月月上旬〜二月
女流展
平成十七年二月十九日(土)〜二十二日(火)
搬入・飾り付け 十八日(金)
県総合文化センター第四ギヤラリー
出品料 千五百円 講評会講師 未定
実技講習會
期日・会場・講師・テーマ・内容 未定

平成十六年度事業計画(主なもの)

顧問参与会

平成十六年四月六日(火) ホテル丸治

第一回専門部長会

平成十六年四月二十二日(木) 県総文センター

会員展

平成十六年四月二十三日(金) 二十六日(月)

県総合文化センター第三・四ギヤラリー

搬入・飾り付け 二十二日(木)

規格:仕上がり寸法 昨年と同様

賞:優秀な作品に対して「栃木県書道連盟賞」

を与える。(受賞経験者を除く三点)

総会

平成十六年四月二十五日(日)

県総合文化センター リハーサル室

講演会 総会と同日・同会場にて

講師 伊藤滋先生

テーマ「上海博物館新収蔵最善本淳化閣帖と碑法帖入門」

(都立平高等学校教諭・東京学芸大学非常勤講師)

懇親会(同日十七時

ホテル丸治 会費 六千円

第一回常任理事会

平成十六年五月三十一日(月) ホテル丸治

第一回理事會

平成十六年六月六日(日)

各専門部会 一〜三回程度実施予定

第二回常任理事会

平成十六年八月二十六日(木) ホテル丸治

会報発行

平成十六年九月一日(予定)

県展入賞入選者のつどい

平成十六年十月三十一日(日)

会場 アビエ 会費 六千円

「県芸術祭会期十月二十三日(土)〜十一月二日(火)」

研修旅行

期日・内容・方面・参加費 検討中

※実技講習会同様、総会時にアンケートをとる。

第二回理事會

平成十六年十二月十二日(日)

高校生顕彰「栃木県書道連盟表彰」

十二月月上旬〜二月

女流展

平成十七年二月十九日(土)〜二十二日(火)

搬入・飾り付け 十八日(金)

県総合文化センター第四ギヤラリー

出品料 千五百円 講評会講師 未定

実技講習會

期日・会場・講師・テーマ・内容 未定